

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・居心地の良い場とするために、丁寧な傾聴を心掛け、また把握したニーズを拠点事業に取り入れていく。 ・利用の少ない外国籍の方や就労している方、妊娠期の方へのアプローチを区と共に検討していく。 ・スタッフは地域の資源の場を見学し、情報をスタッフ間で共有していく。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		B	A
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		A	A
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		A	A
☆			

評価の理由(法人)

(主なデータ)

①【利用者数R4~R6】

R4年度 利用者:13,988名(1日平均57.8名)
 R5年度 利用者:18,618名(1日平均76.6名)
 R6年度 利用者:17,169名(1日平均69.5名)

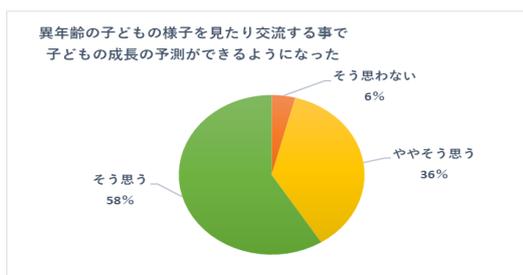
②【マタニティイベント参加者R4~R6】

R4年度 12回開催 プレママ 50名・プレパパ 34名
 R5年度 16回開催 プレママ 56名・プレパパ 52名
 R6年度 11回開催 プレママ 36名・プレパパ 25名

③【父親来館者数R4~R6】

R4年度: 722名
 R5年度:1,036名
 R6年度:1,201名

④【拠点利用者アンケートより R6実施】



⑤【夫婦で参加できる講座R4~R6】

- ・乳幼児の発達を知ろう(0歳~1歳半)(1歳~2歳頃)
- ・離乳食講座
- ・赤ちゃんの眠りの講座
- ・職場復帰後の家族の生活リズムを考えよう

1 利用者を温かく迎え入れる雰囲気づくり

- ・コロナ禍以降、妊娠中に拠点を利用した方や、産後6か月までに来館された方に対して、すきっぷサポーター(*1)が製作した「背守り(*2)」と「メッセージカード」を渡している。また、すきっぷサポーターが居場所で親子と交流する機会も設けている。
- ・様々な国の方を歓迎している雰囲気を作るため、玄関に多言語で挨拶のことばを掲示し、写真を用いてSNSで発信した。
- ・低月齢の子どもを連れて来館するきっかけとなる事業を実施している(ベビーマッサージ体験、赤ちゃんタイム(*3)、足形をとろう)
- ・スタッフは、養育者とのやりとりの中から気持ちを汲み取り、気持ちに沿った過ごし方ができるように気を配っている。また、利用が少ない親子には、他の親子と知り合うきっかけを作ったり、居場所の中で安心して過ごしたり、希望に応じた利用ができるように積極的に声を掛けている。
- ・妊娠中の方やきょうだい児を連れてきた養育者、初めて来館する方など手助けを必要としている方には、入館時に特に手厚くサポートし、安心して訪れ、過ごせるように配慮している。
- ・居場所の壁面に、季節を感じられる絵や子どもに親しみのある絵本のモチーフ、年長の子どもの実習生が作った折り紙を飾り、子どもが入りやすいような工夫をしている。
- ・1日の中でも、利用する子どもの年齢や人数に応じて、居場所に出すおもちゃや遊具を交換している。利用中の幼児や親の希望も聞き、状況を判断した上で対応している。
- ・初めて来館した利用者の名札にハートマークをつけ、日常的に拠点を利用している親子が声をかけやすい環境を作り、スタッフもニーズに応じた交流を促した。
- ・幅広い年齢の子どもが安全に過ごせるよう、家具や大型おもちゃの配置、動線に配慮した。

様式1-1 地域子育て支援拠点事業評価シート

2 多様な養育者と子どもが訪れる場

- ・居場所で親子が過ごしている様子が分かるよう、色々な年齢の子どもが遊んでいる姿や親子の様子、居場所のおもちゃなどの写真をSNSに掲載している。(データ①)
- ・継続した父親向け事業の提供により、父子の利用が増えた。利用している父親の意見も聞きながら、父親が主体となるような取り組みにつなげていく。(データ③、⑤)
- ・保育園、幼稚園に通い、拠点から足が遠のいている3歳以上の子どもが拠点に来るような事業を実施した。(なつまつり、3歳・4歳あつまれ、新1年生になる子の会)
- ・妊娠中の方が拠点に来館した時には、妊娠中や子育て中に利用できる情報を提供し、先輩パパママや乳児と交流をする機会を作り、より丁寧に対応をしている。
- ・これから子どもが生まれるご夫婦、子育て中のご夫婦が参加できる講座を開催した。(子育て支援講座乳幼児の発達を知らう(*4) 離乳食講座、赤ちゃんの眠りの講座(データ⑤))
- ・外国につながる親子に向けた事業を実施した。(ヨガ、いろいろな国のことばで絵本を読む会)スタッフは開催にあたり「やさしいにほんごについて」の研修を受け、チラシや事業作成に活かした。区の区民活動支援センターや横浜市のYOKE、瀬谷区の通訳・翻訳グループにもアドバイスをもらい、対象者への周知も依頼した。
- ・継続して来館している外国につながる養育者に、拠点の印象などを母国語で書いてもらい、SNSに掲載し、居場所にも掲示した。まだ来館がない方に向けて、同じ国の方が利用している事を広く周知した。
- ・子どもの発達に心配がある親子に対して、親子の遊びを通して、子どもの今の育ちを確認し、親の関わり方を考え、参加者の親同士が交流できる場「とらいあんぐる」(*5)を休館日の月曜日に開催した。
- ・養育者が知り合うきっかけとなり、情報交換できる事業を実施した。(第2子以降マタニティあつまれ、ダウン症児の会、多胎児の会、口唇口蓋裂児の会、とらいあんぐる)
- ・居場所に慣れない子どもや気持ちが不安定な子どもが落ち着くための場を設けた。(人目につきにくい場にままごとコーナーを設置し、親子で入れるプレイハウスを導入)
- ・ひとり親家庭の親子に向け、対象の事業(レジン作り、おやこでクッキング:利用者支援事業参照)を開催し、参加後、居場所の利用につながるよう促した。利用時には、丁寧に話を聞き、親子が望む過ごし方ができるように配慮した。
- ・コロナウィルス感染拡大防止により中止していた昼食の場を、感染予防対策に細心の注意を払い再開した。他の親子の食事の様子を見て参考にしていると利用者からの声がある。また、親同士の交流にもつながっている。(データ④)

3 ニーズ把握の場として

- ・日ごろの来館者とのやり取りやアンケートの結果(拠点の利用者アンケート、区役所のアンケート)から、拠点から遠い地域の方に向け、地域の保育園、地区センターや地域ケアプラザと協力して講座や遊びの場などの事業を実施した。(離乳食講座、パパと遊ぶ会、出張ひろばかがやき)
- ・テーマを決め、Q&A(他の方に聞きたいこと、教えたいこと、悩みなど)を自由に記入・閲覧できる掲示板をひろばに設置し、養育者同士やスタッフとの会話や相談のきっかけとなるよう図った。その把握したニーズに合わせた講座を開催し、養育者の困り感に寄り添うことができた(離乳食講座、眠りに関する講座、保育士による育児講座)
- ・居場所での養育者のつぶやきやスタッフとの会話から、養育者が必要としている情報を整理して掲示することができた(1歳児の発達について、熱中症予防について、感染症予防について)
- ・養育者同士がつながる事業を複数回実施した。(赤ちゃんタイム、第2子以降マタニティさんあつまれ、とらいあんぐる)
- ・1歳未満の子どもを持つ養育者は、同じくらいの月齢の子どもを持つ養育者と知り合いたい、親子でゆっくり参加したいというニーズがあるので、対象の事業を「自由に何度でも参加できるもの」と「少人数で予約が必要なもの」に分け、養育者が選んで参加できるように実施した。(赤ちゃんタイム(*3)、ベビーマッサージ体験)
- ・養育者同士がつながる事業を実施し、参加後も関係が継続した。(赤ちゃんタイム、第2子以降マタニティさんあつまれ、とらいあんぐる)

4 交流の中で育ち合う場

- ・育休を取得したことで子育て支援に興味を持った父親に、横浜市の父親支援講座の受講をすすめた。講師となった父親が、地域や拠点でも講座を開催したり、その父親が中心となり、父子で交流する事業を実施した。(パパとすきっぷ(*6)(データ③))
- ・看護学生の実習、小・中学生のボランティアを受け入れ、子育てや地域の子育て支援を学び体験する場となっている。また、養育者にとっても、子育ての経験を学生に話すことで自らを振り返り、子どもの成長を想像する良い機会になっている。
- ・6か月までの赤ちゃんがいる家族に協力を呼びかけ、妊娠中の方が、体験談を聞いたり、赤ちゃんとおふれあいが出来る機会を開催した。マタニティとして参加した方は、出産後に子どもを連れ、家族で妊娠期向けの事業に先輩として参加し、支援の循環ができていく。(足形をとろう(*7))(データ②)
- ・安全面や動線に留意し、大型おもちゃやパーティションの配置を決め、異年齢の子どもとの交流や親同士の交流が生まれやすいようにしている。今の成長を確認し、今後の成長を想像する機会にもなるため、幅広い年齢の子が遊びに来られるようさらに工夫する。
- ・多くの目で赤ちゃんを見守ることができるよう、ベビーベッドを部屋の中央に置き、小さい子を大切に思う気持ちと、自分も大切にもらった思いを育むことにつなげている。
- ・利用する子の年齢に合わせ、簡単に作れる手作りおもちゃなどを紹介し、作り方や遊び方の工夫、子どもへの声の掛け方を伝え、自宅での育児につながるような関わりをした。

様式1-1 地域子育て支援拠点事業評価シート

- (* 1) すきっぷサポーター: 月1回、制作など希望に合わせて活動するボランティア
(* 2) 背守り: 子どもの無事な成長や健康を願って、着物の背中に縫い付けられた刺繍や模様。すきっぷでは「ガーゼ」や「さらし」に縫い、生後6か月までの新規利用者にメッセージカードと共に渡している。
(* 3) 赤ちゃんタイム: 0歳児の親子対象。月1回開催で自由参加の会と申込の会を選べる。養育者同士の交流や子どもとのふれあい方を知り、拠点来館のきっかけにもなっている。
(* 4) 「子育て支援講座乳幼児の発達を知ろう」: 第1子妊娠中の夫婦、子育て中の家族対象。年齢による乳幼児の発達や月齢に合わせた遊び方を現役幼稚園園長から聞く講座。
(* 5) とらいあんぐる: 発達に特性がある子やその不安を抱えている親子が参加し、発達を促す遊びを親子で楽しみ、養育者同士が交流できる支援の場を休館日の月曜日に開催した。
(* 6) パパとすきっぷ: 父子が参加できる遊びの場。土曜日に開催し、父親同士の交流にもつながっている。
(* 7) 足形をとろう: 「マタニティ応援企画」として、妊娠期の家族が参加するイベント時に来館し、先輩パパママとして体験談を話してくれる方が参加できる会。参加者には子どもの足形を差し上げている。

評価の理由(区)

- 1 定例会などで拠点に出向いた際に、利用者を温かく迎え入れる雰囲気・状況となっているか、拠点の様子を利用者目線で確認している。担い手に向けた拠点に関するアンケートにて、「すきっぷを案内しているか」の割合が比較的低くアプローチが必要と考えられた対象者に、拠点に関する説明の時間を確保した。
4か月児健診を受診した児及びその養育者を対象として、子育て支援事業の認知度向上、利用促進、及びより身近な地域の子育て資源を伝えることを目的に、区内で子育て支援を実施している会場を巡るシールラリーを開催し、区内の子育て支援の中核を担っている地域子育て支援拠点(すきっぷ)を景品の交換場所とすることで、拠点の利用促進にもつなげた。
- 2 母子健康手帳交付時、母親・両親教室にて妊婦だけでなくそのパートナーにも拠点を周知し、利用を促している。また、育児不安の強い養育者や障がい等で支援を必要としている養育者には、拠点に同行する等利用につなげるための支援を実施した。とらいあんぐるの事業実施に向けて、区の親子教室での経験を踏まえ助言した。
- 3 子育て家庭のニーズや傾向を把握するため、拠点を利用していない人も含まれる乳幼児健診の対象者に子育てアンケートを実施し、結果を拠点と共有した。また、担い手にも拠点に関するアンケートを実施し、振り返りのきっかけづくりを行った。
- 4 拠点からのアプローチが難しい親子へ保健師が同行して拠点利用のきっかけをつくった。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・区の出生数は減っているが、拠点の利用者は増えている。
- ・スタッフは利用者の子どもの年齢に合わせた遊び方の工夫や子どもへの声の掛け方を伝え、拠点以外での子育てに取り入れられるようなかわり方を伝えた。
- ・拠点に慣れていない親子に、スタッフが働きかけて声をかけやすい環境作りをした。
- ・様々な支援機関の協力を得て、外国につながる親子の利用を促す工夫に取り組み、環境を整備した。

(課題)

- ・父親の居場所の利用や、プレパパ対象事業への参加者は増えているが、参加者同士のつながりが母親に比べ少ない。今後は父親が孤独感を感じないように、継続したつながりや支え合える関係を作れるよう、定期的に事業を実施していく。また、父親のライフスタイルや就労形態を考慮しながら居場所を提供し、父親同士の出会いの機会を増やす。
- ・居場所のスタッフが地域に出向き、拠点のおもちゃや拠点でのあそびを見せたり、相談などの居場所事業を行っていく。
- ・外国につながる親子へのアプローチを検討した方法で呼びかけ、事業への参加や拠点の利用につなげる。
- ・子ども同士が育ちあう場となるよう、様々な年齢の子どもが拠点を利用できるように、より周知していく。

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子ども年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気付き、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

【作業用シート(非公表)】

相互振り返り作業での意見交換内容

・出張ひろばには「拠点を利用したことのない人でも利用しやすい」と「拠点から遠方の人でも拠点機能を利用できる」という2点の役割がある。

・父親の拠点利用や妊娠前から拠点を利用できる仕掛けができてきた。育ちあうことに関しては、母親、父親も参加できる事業を3年程度開催した。子育てしやすい地域、親も子も育ち育てあう、共に育つ、親も子も育ちやすいまちになるようにしていく。

・育休中に拠点を利用する父親は増えている。一方で、仕事を始めると、休みの形態が様々。土曜に父親向けのイベントを開催しても、土曜が休みでない人もいる。

・年齢に合わせた手作りおもちゃを渡し、そのおもちゃの作り方を伝えた。

・年齢によって遊びが違うので、異年齢で遊びやすいように、家具や大型おもちゃの配置を配慮した。大きい子は研修室で体を動かせるように工夫した。

・コロナ禍後、年齢が大きな子が遊びに来るようになり、低月齢の親子が安心して過ごせるように、事故予防にも意識しながら、居場所の真ん中にベビーベッドを配置し、赤ちゃんをみんなで見れるような工夫をした。

・初めて来館する人の名札にハートマークを付け、毎日来ている養育者が新しく来た方へ声をかけてくれている。

・外国につながる親子へは、環境整備を工夫した。今後は折り紙や絵本などから取り組んでみてはどうかという意見があり、検討する。

・父親の事業は継続していく。継続することによって父親同士のつながりもでき、父親の孤独にも対応していく。

・拠点からアプローチができない親子に対して、区の保健師が同行して拠点の利用や他の養育者にもつなげた。

・利用者アンケートの結果「他の親子が(困っている時に)声を掛けあう雰囲気」をキープしている。

・ベビーマッサージ体験は申し込み開始後、すぐ満員になる。キャンセル待ちも多い。低月齢でも来やすいきっかけとなっている。

・共働き、早期に職場復帰をする人は、地域にいる時間が少ないので、妊娠前から拠点を利用できることを周知していく。職場復帰後にも引き続き拠点を利用してもらえるように、今後も異年齢の子や、色々な立場の人が利用しやすい拠点になるように務めていく。

有識者との意見交換内容・コメント

幅広い年齢のこどもの利用について

す: 研修室は普段は開放し、大きい子向けの遊具(平均台、トランポリン)を設置している。

有識者: ゾーニングはできている。拠点利用者としては、短期化・低年齢化しており、大きいこどもが利用しにくい現状がある。全国のアンケートの結果、年齢が高くなっても継続的に利用したいというニーズがある。就学前までの年齢も意識しプログラムなどで意図的に呼びかけてほしい。他区には、小学生になっても利用できるように『小学生ボランティア』という取組もある。

す: 大きなこども(3歳以降)が体を使って遊ぶ、平均台、トランポリンなどがあり、当日の子供の年齢や人数などで調整しておもちゃを変えている。

妊娠期からの周知と赤ちゃんコーナーの変化

有識者: 保育園に早期入園する家庭が多く、拠点利用が短期化。妊娠期からの接点づくりが重要。コロナ前は母親同士の交流が活発だったが、現在は減少傾向。

す: 妊娠期からの取組みにも力を入れており、2024年は妊娠期に拠点利用し、産後の拠点利用にもつながった割合は71%という結果が出た。育児休業の短期化が考えられるため、母子保健と連携し妊娠期からの支援が一層大切と認識している。

多様な家庭への配慮

有識者: DV・虐待・女性相談の掲示、外国人・シングルマザー・ステップファミリーなどへの支援も必要。その点、トイレを活用して情報発信しているところは良い。ピアグループ(シングル・ステップの会、外国人の会など)の相談日などをプログラムとして実施すると居場所を利用しやすくなる。また、愛着形成は、父親や祖父母、地域の方々など、様々な人との関わりの中で育まれていくもの。母親だけに背負わせるのではなく、地域の中に頼れる場があり、使える支援は積極的に活用してよいということを伝えていく。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・スタッフは居場所の中での相談に対してより良い対応ができるよう、地域資源を十分に知り、地域の支援についての理解をスタッフ全体で深め共有していく。 ・横浜子育てパートナーや、専門家につなげた後のフォローやフィードバックを区と共有できるよう意識する。 ・スタッフは様々な研修に参加し、その内容をスタッフ間で共有することでスキルアップできるように努めていく。 ・妊娠期の家庭家族に向けて、参加できる講座等を区と協力して周知に努めていく。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。		A	A
☆			

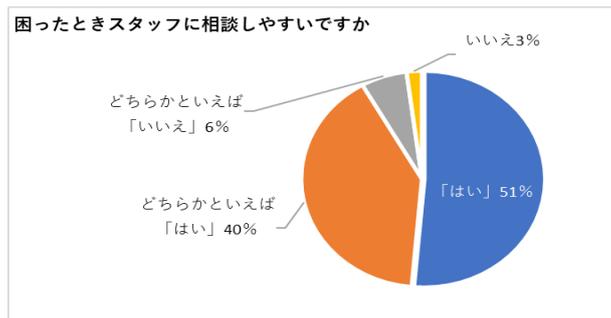
評価の理由(法人)

(主なデータ)

①【相談件数 R4~R6】

	R4年度	R5年度	R6年度
ひろば相談	1897件	1341件	1324件
個別相談	359件	428件	317件
オンライン	153件	62件	14件
年間相談件数	2109件	1831件	1655件

②【利用者アンケート R6】



③【相談内容 R6】

- 1位 親自身 20%
- 2位 生活習慣 18%
- 3位 就園 11%

④【スタッフ研修 R6】

・0歳からの子どもの人生を豊かに育む教育(区主催)・何が変わった令和の妊娠、出産乳児~3歳の子育て・助産師の話(性教育について)・障害者フォーラム・個人情報保護・やさしいにほんご講座、つどいの広場との合同勉強会

1 安心して相談できる場作り

- ・養育者の話を聞くときは、他のスタッフが子どもを見守るなどし、養育者が安心して話ができるよう心掛けている。
- ・相談の内容や子どもの動きに合わせて、話す場所を変える(1Fひだまりや人が少ない場所)など、話しやすい環境作りをしている。気持ちを受け止めた上で、話の内容に合わせて情報を提供している。(データ①、③)
- ・居場所での利用者との会話から(同じ月齢、住んでいる地域、先輩パパママに聞くなど)ニーズに応じてスタッフが間に入り、他の養育者と知り合えるようにした。
- ・事業を開催後に、アンケートを実施し、内容について振り返りを行い、後日参加者が居場所を利用した際に、直接感想や意見を聞くなどし、次の開催につなげることができた。
- ・養育者が事業に参加した後、親子それぞれに寄り添いながら関わることで、信頼関係を築くことができ、継続的な来館につながった。(データ③)
- ・スタッフは養育者の話を聞いた後も、次の来館につながるような言葉がけをするように心掛けた。
- ・相談の内容や必要に応じて横浜子育てパートナーや横浜子育てサポートシステム、専門機関等を案内したり、区こども家庭支援課から対応についての助言をもらい、相談対応や支援に活かした。
- ・区内の親と子のつどいの広場3か所にも声をかけ、スタッフ対象の合同勉強会を開催した。個人情報に配慮しながら、事例を検討し、公認心理士によるスーパーバイズにより、相談対応について学んだ。(データ④)

様式1-2 地域子育て支援拠点事業評価シート

2 多様化するニーズに対応するため、ニーズ把握の場として

- ・養育者から「同じ年齢の子どもの親と話したい」「共通する物がある集団で集まりたい(同年齢、同じ悩み等)」という声から遊びや座談会のテーマや対象者を決めて事業を実施した。(1歳あつまれ、3・4歳あつまれ、とらいあんぐる(*1))
- ・同じニーズを持つ養育者同士が知り合い、相談ができる場を作った。気持ちの共有や不安解消につながるようにした。(1歳あつまれ、3・4歳の会、とらいあんぐる、第2子以降マタニティあつまれ、ふたご・みつごの会)
- ・父親に向けた事業を行うときは、父親でもある専門家を招いて開催した。また、居場所利用者である父親が中心となり、父子で交流する会を開催し、父親同士が話しやすい雰囲気にした。(パパとすきっぷ)
- ・事業終了後のアンケートや利用者アンケート、ひろばでの聞き取りなどから、ニーズの多い講座について、オンラインを活用したり、開催回数を増やすなど、適宜対応して開催することができた。(経産婦が参加できる事業、親子の生活リズムの講座(*2)・眠りについての講座)
- ・拠点から遠い地域の方に向け、地域の保育園・地区センター・ケアプラザと共に講座や事業を開催することができた。(離乳食講座(*3)、保育園の先生とあそぶ、出張ひろばかがやき)
- ・スタッフのスキルアップのため、外部講師を招いた講座や研修を開催した。また、スタッフはそれぞれが必要な研修や講座に自主的に参加し、学びを深めた。(やさしい日本語講座、出産育児について、助産師の話など)(データ④)
- ・居場所スタッフ全員が子育てサロンや親子のつどいの広場といった地域の資源や支援の場へ出向き、その内容をスタッフ間で共有し、地域支援について理解を深めた。
- ・居場所での専門家相談(助産師・保育士・栄養士・歯科衛生士)の後に、毎回専門家と振り返りを行っている。相談の内容から課題を検討し、事業の立案等に繋げた。(離乳食講座、親子の生活リズムについて、乳幼児の発達についての講座、保育士による育児講座など)
- ・相談内容によっては、横浜子育てパートナーや横浜子育てサポートシステムのスタッフと共に対応について考えたり、居場所の事業や専門家相談を案内するなど、拠点の機能を連携して支援に努めた。

- (*1)とらいあんぐる:全5回1コース。子どもの発達を促す遊びを親子で楽しみ、養育者同士が交流できる場を休館日の月曜日に開催した。
- (*2)親子の生活リズムについて:保育園入園を考えている養育者が、居場所で相談を受けている助産師が生活リズムの整え方、食事についてなど、入園までの過ごし方を聞く講座。
- (*3)離乳食講座:拠点から遠い方に向け、地域の資源を利用して栄養士から離乳食のつくり方や進め方を聞く講座のこと。地域の保育園で開催するときは、調理師や保育士からも話を聞くことができる。

評価の理由(区)

- 1 個人情報保護研修を実施し、養育者が安心して相談できるよう支援した。0歳からの子どもの人生を豊かに育む教育を通して、普段の関わりのヒントとなるよう支援した。
- 2 区の支援内容や関係機関の新たな情報等を適宜共有した。定例会や必要時電話などで拠点から相談があったものに対して、助言を行った。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・日頃から養育者と丁寧に関わることにより、養育者のニーズの把握に努め、様々な事業の開催につなげることができた。
- ・相談が多い発達に関する悩みに対しては、同じ悩みを持つ親子が少人数であつまる場を設けた。スタッフが働きかけながら親子での遊びを体験したり、心理士のお話を聞き相談ができるなど、集団の中で子どもの発達と向き合うことができる事業「とらいあんぐる」を開催し、養育者同士のつながりを作ることができた。

(課題)

- ・発達に関する相談が多いため、区こども家庭支援課と調整の上で、居場所で気軽に心理士に相談が出来る機会を設けていく。

- ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。
- ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。
- エ 各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。
- オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、適切に対応しているか。
- カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

【作業用シート(非公表)】

相互振り返り作業での意見交換内容

- ・「とらいあんぐる」などで必要に応じて継続したフォローはできているので、今後はさらに気軽に相談ができる関係を築けるよう継続したフォローをしていく。
- ・相談についてはスタッフ間で共有して対応している。また、継続したフォローとして、相談先を紹介した後の感想などを聞いている。来づらくなることを聞かない、聞き込み過ぎないなど気を付けている。
- ・発達に関する相談が多いことに対し、これまでは区の見立てと異なると困るので、実施してこなかった。今後は居場所で、子どもの育ち相談(発達相談)を始め、区との定例会で報告していく。
- ・R6年度の拠点の相談内容の1位「親自身」、2位「子どもの生活」であった。前年の1位は「子どもの生活」、2位「親自身」であった。順位が入れ替わった理由としては、子どもの年齢が低いと親役割について考える時間があるためか。また、毎日来館する養育者が増えたことで、スタッフとの信頼関係が作られ、育児以外のことも相談しやすくなったこともある。養育者は仕事復帰が視野にある人が多いので、自分の置かれる環境が変わっていく不安、不確定要素も多い。
- ・今後も区が把握している支援機関の情報を拠点にも共有していく。
- ・外国につながる親子に対してのニーズ把握は他機関(YOKE)などの研修を通して学んでいる。
- ・他区の拠点と比較して、居場所のボランティアの呼びかけをしておらず、いろいろな世代の人が拠点にいる感じではないので、ボランティアの受け入れに力を入れていきたい。
- ・居場所スタッフ全員が相談内容に応じた相談先を案内できるように、引き続きスキルアップを図っていく。

有識者との意見交換内容・コメント

相談件数

す：(相談件数の減少は)R6からシステム変更があり、カウントの仕方を見直したため。
有識者：1割が「相談しにくい」と回答しておりどう捉えるか。

専門相談

有識者：泉区は専門相談が少ない。
区役所への相談は保護者にとって高い壁。拠点での気軽な相談が入口になる。物理的な近さではなく、いつも通っている場所で相談できるという心理的近さが大切。他区・他都市ではハローワーク、女性相談、療育センターのPT、OT、ST、助産師、保健師等の相談を実施しているところもある。支援が必要な人が支援を1番遠く感じていることもあり、アプローチが必要。身近な居場所で相談を経験することで、次の相談(区・専門家)につながる入口になる。育てづらさなどの早期の気づきは居場所で見つけやすいので相談につないでいく。
健全層～ハイリスク層まで、段階的なグランデーション支援が必要。外国籍やシングルなど利用人数が少なくとも、利用してもよいことをメッセージとして伝え続けることが大事。
す：助産師・栄養士の相談は行ってきた。育ちについての専門家相談については区の方針との調整があり実施してこなかったが、R7から心理士による発達相談を年4回実施する。

3 情報収集・提供事業

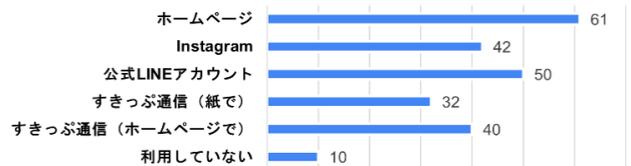
目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・養育者の多様なライフスタイルに応じた情報発信を検討する。 ・拠点の機能や利用方法などを、よりわかりやすく多くの区民に周知していく。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。	・子育て関係の情報を集約するため、各施設から情報を集約できるような仕組みが必要である。	B	B
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。	・SNS等による発信が必要になり、すべてのスタッフの知識やスキルアップが必要とである。 ・支援者向けの情報を直接伝える仕組みがないので、検討をしていく。	B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

	R4年度	R5年度	R6年度
①すきっぷ通信(枚)	1,600	1,500	1,400
②ホームページ閲覧者数	5,209	4,848	4,395
③Instagram(人)	720	1,106	1,283
投稿数	159	120	108
ストーリー投稿数	63	63	40
④公式LINEアカウント(人)	500	737	860
配信数	178	140	160
外部依頼	47(26%)	45(32%)	63(39%)
⑤ちょこっとマップ(冊)	2,000	2,500	2,700

すきっぷが発信している情報で利用しているものは何ですか？



1 多様なライフスタイルに応じた情報発信

- ・ホームページ(以下HP)には拠点の情報だけではなく、子育てサロンなどの支援の場や親子サークル・保育園の地域支援等の情報も掲載し、拠点に来所が困難な養育者にも情報を提供できるようにした。
- ・横浜市地域子育て支援拠点サイト(以下「拠点サイト」)がR6年4月から始まり、登録の方法などを分かりやすく説明できるように資料を作成し、来所時に利用者への説明に活用するとともに、ホームページにも掲載した。その後10月から横浜市子育て応援アプリ「パマトコ」が始まったため、それに沿った説明のマニュアルも独自で作成した。イベントや講座の申込に拠点サイトのシステムを取り入れ、活用した。
- ・拠点サイトにイベント等の情報を掲載し、妊娠期からも利用するパマトコにも反映させ、オンラインでの情報発信に力を入れた。
- ・子育て世代に身近なSNS(Instagramや公式LINE)を活用し、拠点が行う事業の周知や、地域のサロン・親子サークルの情報を掲載する等、情報発信を工夫した。
- ・情報発信は、養育者の利用が多いSNS(Instagramや公式LINE)に力を入れたが、支援者のニーズに応え、紙媒体の情報も適宜提供している。(データ①)
- ・公式LINEアカウントでは、すきっぷのイベント情報を週に1回定期的に発信している。すきっぷが地域の情報集約を担っていることとその効果の認知度が上がり、掲載依頼が来たときは適宜イベント情報を発信した。
- ・利用したことのない人が館内の様子が分かるように、館内を動画で見られるGoogleストリートビューを作成した。また、おもちゃの紹介や親子が遊んでいる様子をInstagramで発信しすきっぷの様子を視覚的に伝えた。
- ・乳幼児健診等で訪れる養育者の目にふれるよう、区福祉保健センター内の壁面に拠点がどのような場所かわかるような案内を、大きなAゼロサイズで作成し掲示した。写真を多く入れたり、二次元コードを入れ、その場で拠点HPを開けるようにした。(資料=保健センターの拠点情報掲示コーナーの写真)

2 情報の集約・提供の拠点であることの周知と区民への周知

- ・幼稚園・こども園に情報提供を呼びかけ、園の秋のイベント情報を集約し、すきっぷ通信の号外を作成した。ホームページからPDFでダウンロードができるようにし、いずみっこひろば(*1)と拠点で紙媒体が必要な人に届けた。
- ・妊娠期から子育て中の人だけでなく、より多くの区民に周知できるよう、産婦人科医院、小児科・薬剤師会加盟の薬局、相鉄いずみ野線の駅・商業施設(イトーヨーカドー・ゆめが丘ソラトス)に、拠点のリーフレットやすきっぷ通信・ちよこっとマップを配架した。
- ・妊娠期に特化したチラシを作成し、区の協力により母子健康手帳交付時に配架した。全妊婦に周知することで妊娠期家庭の拠点利用につながった。
- ・親子の居場所連絡会(*2)・親子サークルリーダー連絡会(*3)・エリア別子育て支援ネットワーク連絡会(*4)の場ですきっぷの事業のお知らせやイベント等の情報・提供をした。また各施設やサロン・サークルのお知らせも集約していることを伝え、地域の取り組みについて情報収集や発信を行った。
- ・泉区子育てガイド「ちよこっとマップ」に泉区の子育てに関する情報を集約し、こんにちは赤ちゃん訪問で配布をし、子育て家庭に届けられた。情報が集約されているため、担い手が説明に活用することができた。また、手元に冊子がなくても見られるよう、拠点HPIにもPDFで掲載した。

3 養育者や担い手の関わり、他機関との協力

- ・子育てサロン・親子サークルや他の施設の子育てに関する情報をすきっぷの公式LINEアカウントから情報発信の依頼がしやすいように、フォーマットを作成し、活用してもらった。
- ・居場所の壁面に「おしえておしえてコーナー」(*5)を作り、幼稚園・保育園選び、ヒヤリハット・おすすめ絵本等、来館している利用者にスタッフが問いかけ回答してもらった。同時にInstagramの機能を使って同じ質問を問いかけ、集まった回答をフィードバックした。また養育者からの質問に、他の養育者が回答したりと、やり取りが行われている。コーナーを介して養育者同士の会話が生まれるなど、交流のきっかけ作りとなった。
- ・泉区の子育てガイド「ちよこっとマップ」R7年度版では(R6年度に作成)、全ての子育てサロン(20か所)の活動の様子や雰囲気や伝わるように新たに取材して撮影した写真を掲載した。相鉄の協力を得て、R6年夏に開業したゆめが丘ソラトスやゆめが丘地域の公園を掲載したり、乳幼児家庭向け防災のページを総務課と連携し作成してコンテンツを増やした。

- (*1)いずみっこひろば:毎年9月に区内の幼稚園・保育園・こども園が集結してパネル展やイベントを行っている。
- (*2)親子の居場所連絡会:子育てサロン・親と子のつどいの広場に加え、定期的に親子が過ごせる居場所を設けている地域ケアプラザや幼稚園・保育園・認定こども園を対象に、年に2回 研修と交流会を行う。拠点が主な事務局となり、区・区社協の協力を得ながら開催している。
- (*3)親子サークルリーダー連絡会:毎年変わる親子サークルのリーダーを支えるために年2回連絡会を実施している。
- (*4)エリア別子育て支援ネットワーク連絡会:泉区を地域ケアプラザが担当する8つのエリアに分け、関係機関や地域の担い手が参加して地域の特性を鑑みながら子育て支援活動を実施。担い手同士の関係性や理解を深め、子育て家庭と地域を繋ぎ、子どもが健全に育つことを目的としている。
- (*5)おしえておしえてコーナー:居場所に掲示板を設け、テーマを決めて利用者に体験を書き込んでもらうコーナー。(例:我が家のヒヤリハット、園さがし体験談 等)

評価の理由(区)

- 1 子育て支援に関する情報はきめ細やかに拠点と共有し、常に最新の情報を提供している。また、「ちよこっとマップ」の更新に協力し、新生児・転入者には全戸配布、担い手にも新しいものを提供している。
- 2 担い手が集まる場にて、拠点のSNSを利用して情報発信ができることを周知する時間を設けた。その結果、令和6年度に実施した担い手に向けた拠点に関するアンケートにおいて、拠点に情報の集約・提供・発信の機能があることの認知度は99.2%であった。
- 3 区役所区民ホールにて、子育てサロンなど泉区内で活動する子育て支援グループに対し、日頃の活動に感謝の気持ちを伝えるため、区長から感謝のメッセージとプレゼントを贈る感謝会を実施し、多くの子育て支援グループが活動していることを区民に周知することができた。感謝会には泉施設長にも来賓として出席いただいた。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・養育者のニーズに合わせ、SNSの発信に積極的に取り組んだ。拠点がSNSで発信することによる効果が広く知られ、関係機関や子育てサロン、親子サークルから発信依頼される数が増えて好循環を生んでいる。
- ・令和6年4月開始の「拠点サイト」のシステム構築や導入に伴い、令和3年から「DX検討区」の1つとして他区拠点や市・ベンダーと話し合いを重ね、円滑な稼働に貢献した。また拠点サイト運用開始後にパマトコが開始するにあたり、利用者の混乱を軽減するようユーザーインターフェースを提案したり、パマトコ内の地域子育て拠点紹介ページの改善案を作成し提案した。
- ・利用者がよりわかりやすくシステム登録や利用ができるよう、独自のマニュアルを作成し拠点HPにも掲載した。
- ・「拠点紹介と妊娠期向け事業のお知らせ」チラシを作成し、母子健康手帳交付時に渡してもらうと共に母親・両親教室でも配布し、妊娠期家庭の拠点利用につながった。
- ・ちよこっとマップに地域の情報を集約して掲載したことで、養育者に伝わりやすく、担い手も活用しやすくなった。

(課題)

- ・令和6年度の区のアンケート結果で、拠点を利用したことがない理由に「施設の内容や利用方法がわからない」が最も多かったことを真摯に受けとめ、拠点の周知について区と共に改善策を検討していく。
- ・拠点や地域の場の様子がイメージができるよう、写真などを取り入れ紹介できるような発信を拠点内やホームページに掲載し、利用につなげる。
- ・担い手や養育者・地域の人と一緒に発信できる仕組みを拡大させる。(エリアネットのマップ作りやまち歩き(保育)での地域の情報を持ち寄った活動を全エリアに拡大したい)。

振り返りの視点

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ ネットワークを活かして情報を収集し、を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 様々な子育て支援情報を拠点が集め、提供していることを広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

【作業用シート（非公表）】

相互振り返り作業での意見交換内容

- ・ちよこっとマップを協働で作成したこと、区と拠点のそれぞれのつながりの中で広く配布し、養育者にも支援者にも活用してもらえている。
- ・多くの利用促進につながるように、拠点や地域の支援の場の様子や活動内容が、より詳しく伝わるような案内を発信する。
- ・養育者が関わった媒体や情報発信の仕組みに十分取り組めていないことは課題に思っている。
- ・市のシステムの変更に伴い、利用者目線で使いやすいものになるように、市に協力した。養育者登録の手順を分かりやすく説明した資料を作成・配布して、居場所でも案内に活用した。

有識者との意見交換内容・コメント

情報発信の課題

有識者：「施設内容や利用方法がわからない」が増加。また同時に「保育所や幼稚園に通っている」も伸びている。これは拠点を利用せずに保育園に通い始める世帯(6ヵ月で保育園預ける世帯)がいるということ。妊娠期から、または、入園後も、拠点の活動内容やどんな場所でどんなことをやっているか、周知することが大事。

す：周知の工夫としては両親教室や区役所モニターでスライドショーを流し、母子手帳交付時にチラシ配布などしている。また、システム変更の影響でR6から登録制になり、利用しづらい印象を与えた可能性がある。

発信方法の見直し

HPには課題はなかった。今の子育て世代は文字より動画・画像で情報収集。Instagram等でイベント周知だけでなく「どんな事業だったか」というアウトプットで活動報告を発信すると効果的。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	・「妊娠期・多胎児・障がい・外国につながる」といった多様な家庭を支える取組を、地域の様々な担い手や関係機関と共有し、温かく受け入れ支えていけるよう協力して行う。 ・養育者と地域の方々と、双方のニーズに合った「つながり」を作るよう、エリア別ネットワークや地域の関係機関との連携の中で取り組んでいく。	B	B
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。		A	A
☆			

評価の理由(法人)

(主なデータ)

・「拠点を利用して、地域を身近に感じるようになりましたか?」(拠点利用者アンケートより)
『そう思う+ややそう思う』92%(令和5年度)⇒96%(令和6年度) 『そうは思わない』8%(令和5年度)⇒4%(令和6年度)

①泉区子育て支援連絡会(*1)・エリア別ネットワーク(*2)の実績

	令和4年度	令和5年度	令和6年度
泉区子育て支援連絡会	参加者/年 50名	参加者/年 65名	参加者/年 63名
内容: (年2回開催)	・関係機関の活動発表 ・ワーク「コロナ禍で子育て家庭に情報をどう届けるか」(情報発信の工夫) ・コロナ禍での親子の姿容と工夫(保育園より) / 支援の場の工夫(幼稚園・エリアごと発表) ・ワーク「発表を聞いて意見交換・取り入れた工夫」	・「支援者がハッと気づけるヒント集」(区作成)の共有 ・ワーク「父親の地域デビュー支援」 ・「多世代を巻き込むには」 ・研修会「地域でつながる「子育て」をはじめようーまち保育のススメ」 ・ワーク「自分のエリアを可視化してみよう」	・全エリアの活動発表 ・ワーク「発表を聞いた感想や質問/地域で取り組んでみたいこと」
エリア別 子育て支援ネットワーク	全体会議開催(子育て支援関係者を招き、活動状況の共有や意見交換を行う)		
主な活動: (通年)	区役所前ひろばで外遊びと読み聞かせ 災害時の子育て支援について(講話) お芋ほり(地元農家で) 「まち保育」講座(オンライン併用)	公園あそび 支援者向け救急救命講座 ブラレールであそぼう 公園あそびと焼き芋/お餅つき体験 町内会の祭りへの参加(こどもブース)	お芋ほり(地元農家で) 高齢者施設の芝生で遊ぼう まちを歩いてマップをつくろう おさんぽワーク 地域を歩いてみよう 皿回しやジャグリングで遊ぼう

②親子の居場所連絡会

親子の居場所連絡会	令和4年度	令和5年度	令和6年度
回数/参加人数:	①10団体12名②13団体15名	①16団体23名②12団体13名	①16団体23名②11団体14名
内容:	①講演会「支援にコーチングの手法を取り入れる～サロンで育つ子どもの心」②おもちゃ作り	①派遣ボランティア団体紹介②講演会「これからの子育て子育て支援の取組み～コロナ禍を経て」(土谷みち子先生)	①おもちゃ作り②講演会「子育て支援のための傾聴と気づき」

③子育てサロン・親と子のつどいの広場への専門家・ボランティア団体派遣の回数と利用状況

サロン・つどい専門家派遣	令和4年度	令和5年度	令和6年度
利用回数(年間のべ):	14件	26件	24件
3年分の利用内容(多い順に):	①歯科衛生士相談 ②人形劇 ③パルーンアートと手品 ④わらべうたの会 ⑤栄養士相談・読み聞かせ ⑥助産師相談		

④子育てサロン・親と子のつどいの広場・親子サークルへの【大型絵本・粗大おもちゃ 貸し出し件数】

令和4年度=19件 令和5年度=21件 令和6年度=34件

⑤地域での【公園あそび】実績

地域での公園あそび	令和4年度	令和5年度	令和6年度
公園数/実施回数/参加人数:	10公園/33回/親子613人	10公園/36回/親子604人	10公園/33回/親子555人 (39回予定も高温・雨により6回中止)

⑥入学前の気持ちを話そう(支援級に進学する子の保護者と先輩母をつなぐ)(利用者支援事業 注釈*3参照)

令和3~5年度 参加人数: 計56人

双子ちゃん集まれ(多胎児サークル連携) 参加人数: 令和4年度=親12子14人 5年度=親13子19人 6年度=親10子19人

親子のためのコンサート(障がいのあるお子さんと家族向け) 参加人数: 令和5年度=親子25人 6年度=親子27人

⑦フードパントリー@すきっぷ(法人主催) 令和3年度7月~5年度11月まで13回開催 のべ 321世帯利用

(ひとり親率 76% 中学生以上の世帯率 59%)

●横浜市・企業とのタイアップ: 「家事シェアセミナー」(横浜市政策局男女共同参画推進課/(株)ライオン)

令和5年開催 参加人数: 親子51人

●参加した会議: 泉区地域福祉保健計画推進協議会・策定委員会/要保護児童対策協議会(全体・地区別)/泉区社協広報委員会

●その他 18区連携での活動: こども青少年局こども家庭支援課への協力 地域子育て支援拠点DX検討チーム(令和3~5年度)/

施設長会による「地域子育て支援拠点ネットワーク」にて『情報』の担当として18区拠点スタッフ向けに情報収集・発信事業に関わるスキルアップ研修を開催(平成29年~令和6年度まで)

1 泉区の子育て支援ネットワークを支える事務局として

・区域の「泉区子育て支援連絡会」(*1 以下「区域の連絡会」)、エリア別子育て支援ネットワーク(*2 以下「エリアネット」)の事務局として、拠点で捉えている親子の姿やニーズを会議等で関係機関や地域の担い手に伝えながら、ネットワークの活動が子育て家庭に届き地域の子育て支援が充実するよう努めた。(データ①)

・区域の連絡会を年2回開催し、1)各エリアネットの活動報告と意見交換、2)学び(研修)と意見交換を行った。直接顔を合わせて話す機会となり、エリアを越えて担い手同士の交流が出来る場となった。また、他のエリアの活動を聞き、取組みや工夫したことを共有しあい、各エリアへ活動のヒントを持ち帰る場ともなった。(データ①)

・エリアネットにおいて、区域の連絡会での講座からの学びを活かした取組みを実施した。(例: 養育者と共に地域の支援の場を巡る、養育者を交えて地域資源を掲載したマップづくりをするなど) (データ①)

・複数の地域にまたがっていたエリアネットを地域の実情に合わせて分割した際に、改めて関係機関や担い手に向けて活動状況やニーズを丁寧に聞き取るための会を開催したり、関係機関にアンケートを実施してニーズや課題を整理し、エリアネットの活動に取り入れた。(例: 地域の保育園と連携したいという担い手のニーズに応え、園の見学を兼ねて園内でエリアネットの会議を開催できるよう働きかけ、互いの活動の理解が深まった。)

2 多様な親子を支えるための、拠点事業の周知や繋がり作り

・親と子のつどいの広場に出張して妊娠期向けの事業を行い、拠点から離れた地域の妊娠期の家庭の参加があった。つどいの広場の担い手が妊娠期向けの事業を経験することで、妊娠期の家庭に向けた支援に積極的に取り組んでもらうことができた。

・妊娠期から拠点を知り利用につながるよう、拠点の様子がわかるスライドショーを作成し区の両親教室で案内したり、妊娠期向けの事業を参加者の感想を交えて周知した。更に広く「働いているマタニティ家庭」にアプローチするため、市内の企業に働きかけ、社員に向けて拠点の機能や事業について周知する協力を得た。

その際、相鉄線沿線の拠点にも声をかけ、企業への周知を一緒に行った。

・妊娠期向けの事業や父親育児支援事業について、ローカルメディア(神奈川新聞社・タウンニュース社)に働きかけ、内容や事業の効果への理解を得て、周知にも協力が得られる関係性を作った。(資料=カジークジー新聞掲載記事)

・泉区薬剤師会に働きかけ、区内の薬局に拠点の広報紙の配架をした。

・地域福祉保健計画の策定に関わる場で、養育者が地域に対して関心を持っていることを伝えたり、災害時の援護対象に乳幼児家庭を考慮してもらうことなどを提案した。

・外国につながる親子の支援を円滑に行うために、YOKE(横浜市国際交流協会)や「カムオンシェシェ」(瀬谷区の多言語支援団体)、区の多文化共生コーナーの協力や助言を得て事業を開催し、特に外国につながる親子が多く住んでいるエリアネットの活動の場で周知協力を依頼し、エリアネットを構成する人や関係機関に事業の見学や参加を呼び掛けた。

3 地域の子育て支援活動を支える

・「親子の居場所連絡会」(*3)を年2回開催し、担い手同士のつながりを作ると共に、参加者アンケートからニーズを捉えて研修会を企画し実施した。(データ② 親子の居場所連絡会参加人数)

・子育てサロンや親と子のつどいの広場といった地域の支援の場で親子が専門家に相談したり、親子とサロンの担い手が一緒にイベントを楽しむことができるよう、専門家やボランティア団体を派遣した。歯科相談や栄養相談の開催は、利用者のみならず担い手にとって今の養育者の課題を捉える機会ともなった。(データ③ サロン派遣の回数と派遣内容)

・子育てサロン、親と子のつどいの広場、親子サークルの活動について広く周知するため、養育者にとって身近なSNS(Instagramや公式LINE)での発信を行い、効果が認知されてきた。担い手が発信を依頼しやすいような仕組み(すきっぷHPにフォームを設置)を作り、区域の連絡会や親子の居場所連絡会などで知らせたり、ニーズに応じて個別に使い方の説明を行った。

・子育てサロン、親と子のつどいの広場、親子サークルの活動に活かせるよう「大型絵本」「大型おもちゃ(ボールプール、パラバルーン、トンネル等)の貸し出しを継続し、利用が増えている。(データ④ 貸し出し件数)

4 地域の資源(人・機関・場所・機会)に、利用者をつなぐ

- ・全エリアネットに担当者(常勤・非常勤)を配置し、毎月のスタッフ会議で各エリアネットの活動を共有した。担当していないスタッフも、エリアの活動を理解した上で養育者に地域資源を案内・紹介することが出来た。また、居場所スタッフは全ての「子育てサロン」や「親と子のつどいの広場」を訪問し、利用者への案内を丁寧に行うことに活かした。
- ・地域で子育て支援に関わる人の協力を得ながら、拠点から遠い地域での公園遊びを継続した。(みんなで公園であそぼ～) 子育て支援者の他、子育てサロンや親と子のつどいの広場の担い手に関わることで、養育者が公園と支援の場の両方を利用することにつながった。(データ⑤公園あそび集計)
- ・区と協働で実施してきた「子育て応援サポーター」(*3)として活動する人が増え、新たに担い手として活動する人も少しずつ増えてきた。「子育て応援サポーター」の研修会や交流会で情報交換し、知り合い、ネットワークが広がった。(データは人材育成事業参照)
- ・拠点から遠く、日常的に拠点を利用しづらい地域へのアウトリーチを行うため、区と共に基幹相談センター「かがやき」に働きかけ、「すきっぷ出張ひろば@かがやき おもちゃ館」を2回試行的に開催し、令和7年度からの施行の準備をした。
- ・令和4年に再開した「区民まつり」に「赤ちゃん休憩所・授乳とおむつ替えスペース」を担当して参加を再開し、拠点のリーフレットや事業のチラシを配布して広く区民に周知した。また、「区民まつり」そのものを子育て家庭に周知し来場を呼び掛けた。(資料=まつりのテント内写真)
- ・「多胎児サークルみどふぁど」や「つくしんぼ会」「ハッピークローバークラブ」といった当事者の会(*4)に協力を呼びかけて事業(*5)を行い、参加した養育者をそれぞれの会につなげたり、話を聞ける機会とした。(データ⑥事業の参加人数)
- ・エリアネットでつながりのある音楽団体を招き、障がいのある子ども(赤ちゃんから小学生まで)を持つ家庭を対象にしたコンサートを日曜日に拠点で開催した。開催にあたり、曜日設定や会場のレイアウト、演奏時間などについて当事者の会や支援関係者に相談しながら準備を行った。(データ⑥事業の参加人数)
- ・法人主催で、令和3年から令和5年まで、妊娠中～未成年の子どもがいる家庭を対象とした「フードパントリー@すきっぷ(食支援と子どもの古着やオムツ、生理用品の無償配布)」を隔月で開催し、ひとり親や生活困窮世帯の利用があった。孤立している養育者(中学生保護者)を区社協(生活資金貸し出し)や区(生活支援課)につなぎ、未就学児の家庭には子育てパートナーが対応し、相談対応や情報提供を行った。(データ⑦ フードパントリー回数と参加人数)

(*1) 泉区子育て支援連絡会:区内の子育て支援関係者やエリア別ネットワーク(*2)の担い手が、顔を合わせて個々の活動状況や、エリア別ネットワークの活動の共有を行い、各エリアに持ち帰る。年2回のうち1回は研修を行い、意見交換をしている。

(*2) エリア別子育て支援ネットワーク: 泉区を地域ケアプラザが担当する8つのエリアに分け、関係機関や地域の担い手が参加して地域の特性を鑑みながら子育て支援活動を実施。担い手同士の関係性や理解を深め、子育て家庭と地域を繋ぎ、子どもが健全に育つことを目的とする。令和5年から、より細かくエリアを分けたことによりネットワーク数が5から8に増加。拠点は区・区社協・地域ケアプラザと共に事務局を担い、全エリアに職員を配置している。

(*3) 子育て応援サポーター: 地域の支援の場で養育者の話を傾聴し、寄り添って応援するボランティア。地域情報や区の支援も案内し、必要に応じて拠点の子育てパートナーや区の保健師につなげる役割を持つ。サポーターとして登録するには規定の研修への参加が必要で、登録し活動している人に向けては拠点と区が毎年フォローアップ研修と交流会を開催している。

(*4) 多胎児サークル「みどふぁど」: 2005年に設立された泉区で多胎児を育てている家庭のサークルで、子どもが成長してもOBとして繋がりがあある人もい。ハッピークローバークラブ(ハピクロ会): 1997年設立の、泉区と近郊の「ダウン症児を育てている家族の会」で成人の子どもがいるOBも繋がりがあある。つくしんぼ会: 1972年に設立された、泉区・戸塚区の障がい児自主訓練会。

(*5) 「みどふぁど」と共催で、多胎児ならではの子育ての相談にサークルOBが答える「双子ちゃん、あつまれ」(区・区社協と拠点が協力)を開催した。「つくしんぼ会」「ハッピークローバークラブ」には、就学前相談を受けたり療育につながる年中・年長児の養育者に向けた「入学前の気持ちを話そう」(人材育成・利用者支援事業参照)の先輩養育者として協力を得ている。その他、拠点居場所で行う事業(ダウン症の家庭のおしゃべり会・ふたごみつごの日)にも協力を呼びかけ、参加してもらった。(親子の居場所参照)

評価の理由(区)

1 区と拠点と区社協等が事務局となり、ネットワークの構築・推進を目的に子育て支援連絡会や各エリアネットワーク連絡会を開催し、地域に定着してきている。

2 エリアネットワークで作成した地域情報等を拠点利用者を含む子育て家庭に紹介し、地域の居場所に参加できるような工夫をしている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・泉区子育て支援連絡会(区域の連絡会)と、8つのエリアに分けたエリアネットの目的や活動の方針が、関係機関や地域の担い手に理解された上で活発に活動が行われた。
- ・区や区社協、地域ケアプラザと協力してエリアネットの事務局を務め、活動の下支えをすることが出来た。特に養育者に向けた情報発信や、居場所利用者への案内、イベント募集や養育者アンケートにインターネットのツールを活用するなど、拠点の強みを活かした貢献が出来た。
- ・エリアネットの活動の場に拠点の様々なスタッフが出ていくことで、拠点全体が地域の子育て支援ネットワークを支えていることが認知され、相談されたり頼まれる関係性が出来た。

(課題)

- ・エリアネットの活動(事業)を常に見直し、親子の姿やニーズを捉えながら、各エリアに必要な活動を検討し実行していく。その中で、妊娠期はもとより多胎児・外国につながる親子・シングル家庭等への支援が広がるよう働きかける。
- ・少子化やライフスタイルの変化により、親子が地域で過ごす時間が少なくなる傾向は変わらない中で、地域の支援の場がどう対応していくか、支援の場につながらない親子に対して何をどう働きかけていくかについて、ネットワークを構成する人や関係機関と共に引き続き考え、互いの強みを活かして取り組んでいく。

振り返りの視点

ア 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。

イ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。

ウ 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、子育て支援分野に限らず、様々な社会資源と連携・協力した取組を実施しているか。

エ 養育者や子育て支援活動に関心のある人を身近な地域の子育て支援の場や地域の活動につなげているか。

【作業用シート（非公表）】

相互振り返り作業での意見交換内容

- ・区としては、エリアネットワークのあり方進め方などを考える段階に来ていると考えている。
- ・地福会議との関連でいえば、子ネットは実働部隊と思う。
- ・担い手が不足している＝共助の部分　そこをエリアネットが補うものではない
(区・拠点で見解が一致)
- ・区としては、子育て支援連絡会は子育ての健全層に向けての取り組みでもあるため、拠点として、ネットワークとして活用したいことを主導してもらってよいと思っている。(区)
- ・拠点としては子育て支援連絡会は区が主導してやるものと考えている。
区全体で子育て課題を考える場。市や区の方向性がどうなっているか、大きな区の方針を伝えるところ。(すきっぷ)
- ・子育て支援連絡会はエリアネットの活動の発表の場として使う。区が伝えるのとは番外編でよいのでは(すきっぷ)
- ・地域福祉保健計画と子育てネットワークの活動をうまく連携させていくよう事務局の四者で考えていく(区)
- ・妊娠期からの100か月(こども家庭庁)が大事という部分を子育てネットワークが支援している(すきっぷ)
- ・ネットワークの部分ではないが、親子の居場所連絡会やサークルリーダー研修など、合同でできることもあるのでは。各会の継続に向けて工夫もできると思った。(双方で一致)

有識者との意見交換内容・コメント

支援の役割分担

有識者: こども家庭センターはハイリスクとポピュレーションとの連携が求められる。全数把握ができることが母子保健の強みだが、健診等限られた時間で生活背景等をつかみ取ることは難しい。拠点はネットワークを活用し親子を見守るセーフティーネットを広げる。そのためにも、地域の人材を育成する。子育てパートナーが地域に出向いたり、育成された人材が、支援の入口・出口になり、情報共有しケースの支援につなげる。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 「子育て応援サポーター」や「子育てサポートシステム」の提供・両方会員(預かる会員)を広く区民に周知し、子育て支援に関心を持つ人の活動の入口としていく必要がある。 時代に応じて変化する養育者のライフスタイルに対応して支援できるよう、地域の担い手や関係機関と共に学んだり、変化を伝えて共に考える機会を作る。 	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		A	A
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		A	A
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	A
☆			

評価の理由(法人)

(主なデータ)

①

親子の居場所連絡会	令和4年度	令和5年度	令和6年度
	内容: (年2回開催)	参加者/年 28名 研修会「サロンで育つ心からだ〜0歳から1歳児の遊び・コーチングの視点を交えて」(保育園主任による) / 交流会・研修会「親子との関係づくり」/ おもちゃ作り交流会	参加者/年 37名 サロン・つどいの広場に派遣しているグループの紹介(実演)子育て川柳づくり(交流会)・研修「現代の子育ての実情と不安」(土谷みち子氏)と交流会

②

子育て応援サポーター	令和4年度	令和5年度	令和6年度
新規登録者:	8名	22名	6名
フォローアップ研修参加者:	18名	18名	17名
フォローアップ研修テーマ:	私たちパパママ応援団〜知っている役割立つイマドキの子育て	子どもの育ちを地域で見守る〜多様な育ちを理解する〜	子育て世代の背景の理解とコミュニケーションのコツ
令和6年度末時点登録者: 58名			

③

年	そうは思わない	ややそう思う+そう思う
2022年	5%	95%
2023年	8%	92%
2024年	4%	96%

1 担い手のニーズを汲みながら、情報をアップデートする機会を作り、活動の継続をサポート

- 「親子の居場所連絡会」(*1)を年2回開催し、区内の子育て支援関係者の横のつながりを作ると共に、担い手のニーズに沿った研修会を実施した。講義とグループワークを行うことで、スキルアップとモチベーション維持につなげている。ワークの一つとして行った「おもちゃ作り」は、活動の場に持ち帰れるよう、地域の支援の場を多く利用している子どもの月齢を考慮して準備した。
- 区内の「親と子のつどいの広場」3か所に呼びかけ、スーパーバイザー(公認心理士)を交えてスタッフ向け勉強会を行った。親子への視点やスタッフの対応について学び合った。(R5,R6開催)
- 区と協働で取り組む「子育て応援サポーター」(*2)(以下「応援サポーター」)の仕組みや研修を、地域で新たに子育て支援に取り組む方々の育成に利用してもらうことが出来た。
- 「応援サポーター」になる人のための育成研修と、既に活動する人のためのフォローアップ研修にて、拠点から見える「今どきの親子・夫婦の姿」を伝えた。
- エリア別子育て支援ネットワークの活動の中で、担い手のニーズを聞きながら学びの機会を作った。(例: 支援者向け救急・救命講習会、災害時の子育て支援についての講話、等)
- 主任児童委員の改選の後に、新たに委員になった方を対象に拠点の見学と拠点機能の説明を行った。(令和5年度 8名参加)
- 親子サークルのリーダーを対象に、区・区社協とともにサークルリーダー研修会を運営し、活動が継続するようサポートした。(親子サークル数は平成27年以来、10サークルを維持している) 居場所で常時サークルのPRチラシを掲示して利用者に案内し、イベントの際にサークル参加者が自らPRをする時間を設けたり、依頼に応じて拠点のSNSでサークル活動のPRを発信した。
- 法人主催の勉強会を開催し、地域の担い手にも声をかけ共に学んだ。(令和4年度=乳幼児救命講習 5年度=「子ども・子育て家庭を支える支援者が知っておきたいこと〜COVID-19の流行と子どもの育ち」6年度「乳幼児期の子育ち・子育てを支える」)

2 体験や、興味関心を活かして担い手となる仕組みづくり

・「応援サポーター」を毎年新たに募集し、育成研修を行った上で希望に応じて地域の支援の場につなげた。「応援サポーター」として登録した人を、横浜子育てサポートシステムの提供会員や、担い手が不足している子育てサロン、地域や拠点が主催の「公園あそび」の担い手につなげた。応援サポーターの希望に応じて地域ケアプラザにつなぎ、新たに親子が集まれる場を作るなど、活動が広がった。(データ②子育て応援サポーター登録者数/研修内容) 養育者に向けては、拠点の情報発信を通して応援サポーターの周知を行った。

・養育者が様々な形で、他の養育者のためにボランティアが出来る仕掛けをし、参加を働きかけた。

(例)

・テーマを決めて、他の養育者に体験を伝えられる「おしえておしえてコーナー」(*3)を設け、SNSでも共有した。
 ・マタニティ家庭に向けて、居場所の利用者に体験やアドバイスを書き込んでもらうアンケートを作り、ファイルして自由に閲覧できるように

した。
 ・事業に参加するマタニティ家庭の方に、赤ちゃんを抱っこさせてくれたり出産や産後の話をしてくれる養育者が集まる仕掛けをした。

(「赤ちゃんの足型をとろう」)

・育休を取得しながら拠点を利用していた父親に、父親向け育休講座の講師を依頼し、講座内容を一緒に考えて実施した。

・「多胎児サークルみどふぁど」や「つくしんぼ会」「ハッピークローバークラブ」といった当事者の会(*4)に協力を呼びかけて事業を行い、参加した養育者をそれぞれの会に繋げたり、話を聞ける機会とした。(ここまでネットワーク 項目4再掲)特に「入学前の気持ちを話そう」(小学校で支援級や支援学校に通う子どものいる養育者が、通っている子どもの養育者に話を聞ける会・利用者支援事業参照)では、参加者が入学後に先輩として来てくれる好循環が生まれた。

3 広く市民に対して子育て家庭を温かく見守る働きかけ

・地域福祉保健計画の策定会議に参加し、子育て家庭はきっかけがあれば地域を身近に感じることができていることを伝えた。また、妊婦や多胎児家庭、年子の家庭の状況を伝え、災害時の支援への理解を呼びかけた。(データ③ 拠点のアンケートグラフ)

・拠点でのボランティア「すきっぷサポーター」の方が定期的に手作り活動をしているが、作成した「背守り」(*5)や折り紙を居場所を利用する親子に渡したり、背守りに添えたカードでメッセージをやり取りすることで、養育者が地域の方に温かく見守られていることを実感する機会となった。また、活動日に居場所で利用者と交流し、活動の励みにしてもらうことができた。

・孫育て講座を開催し、祖父母となる世代の市民に向けて今時の出産・子育ての状況を伝え、それを踏まえて温かく見守り支える意義を伝えた。また、横浜子育てサポートシステムの提供会員やボランティア活動(すきっぷサポーター)も案内し参加を促した。

・横浜子育てサポートシステムの提供会員や入会説明会の参加者(提供・両方会員候補)に呼びかけ、「応援サポーター」や公園あそび事業の担い手につなげた。

・居場所や情報発信事業を通して、区の「子育て応援マーク」の周知に協力した。

4 学生やこれから親になる人に向けて、子どもや子育て家庭とふれあう機会をつくる

・マタニティ家庭を対象とした「親になる前支援」として事業を行う狙いを、区・助産師と話し合いを重ね、「生まれる前に、産後の生活をイメージして、パートナーと話し合う機会」となり、かつマタニティ世代に親しみやすいカードゲームを使う講座(カジークジー)(*6)を開催した。

同日に、居場所で実際の赤ちゃんに触れたり、養育者と交流する時間を設け、子育てのイメージを持てるよう働きかけた。養育者に向けては、その日に赤ちゃんを連れて来所してもらえるような仕掛けをし、「マタニティ家庭との交流を通して産前産後の不安が軽減された」という声が参加者アンケートに多数あった。

・中学校の職場体験を試行的に2校受け入れた。妊婦体験や赤ちゃん人形の抱っこの時間も設け、実際に親子とふれあい、自らの命や子育てについて考えたり学ぶ機会となった。令和7年度から区内の全中学校を対象に職場体験の施設であることを周知するための準備となった。

・中学生に向けては、拠点での実習受け入れ以外にも、エリアネットワークの活動として親子と子育てサロンなどの地域の担い手が中学校に出向き、赤ちゃんに触れ合い、親や担い手の話を聞く機会を作った。(資料=いつものサロン大集結写真)

・市内の企業へのアプローチを行い、社員に向けて拠点事業の情報提供をする協力を取り付けた。それに伴い、近隣の3拠点にも声をかけ共に情報提供を行った。

・看護学生の母子保健実習や、泉区社協が主催する「いずみサマースクール」では小中学生を受け入れた。

(*1)「親子の居場所連絡会」:子育てサロン・親と子のつどいの広場に加え、定期的に親子が過ごせる居場所を設けている地域ケアプラザや幼稚園・保育園・認定こども園を対象に、年に2回 研修と交流会を行う。拠点が主な事務局となり、区・区社協の協力を得ながら開催している。

(*2)子育て応援サポーター:地域の支援の場で養育者の話を傾聴し、寄り添って応援するボランティア。地域情報や区の支援も案内し、必要に応じて拠点の子育てパートナーや区の保健師につなげる役割を持つ。規定の研修への参加が必要で、拠点と区が毎年フォローアップ研修と交流会を開催している。

(*3)おしえておしえてコーナー:居場所に掲示板を設け、テーマを決めて利用者に体験を書き込んでもらうコーナー。(例:我が家のヒヤリハット、園さがし体験談 等)

(*4)多胎児サークルみどふあど:2005年に設立された泉区で多胎児を育てている家庭のサークルで、子どもが成長してもOBとして繋がりがあがる人もいる。

つくしんぼ会:1972年に設立された、泉区・戸塚区の障がい児自主訓練会

ハッピークローバークラブ:1997年に設立された、泉区とその近郊の「ダウン症児を持つ親の会」

(*5)背守り:子どもの無事な成長や健康を願って、着物の背中に縫い付けられた刺繍や模様。すきっぷでは「ガーゼ」や「さらし」に縫い、生後6か月までの新規利用者にメッセージカードと共に渡している。

(*6)カジークジ:出産後の「育児・家事・仕事」について、カードゲームを進行しながら日常に起こり得ることを見える化し、役割分担やコミュニケーションの必要性に気づくことを狙いとする講座。産前産後に利用できる区内の子育て支援情報も知ることができる。

評価の理由(区)

- 1 親子の居場所連絡会、親子サークルリーダー研修、応援サポーターフォローアップ研修など活動を継続できるよう支援し、子育て支援を担う方のモチベーション維持向上に努めた。
- 2 地域毎の特色を生かしながら各エリア別子育て支援ネットワーク連絡会を開催し、養育者に地域活動の大切さを伝えている。また、子育て応援サポーターの募集に協力し子育て応援サポーターの人材育成に取り組んでいる。
- 3 お出かけ応援シールラリー事業を通じて親子が地域に出向く仕掛け作りをしている。拠点のスタッフに4か月児健康診査時に毎回区に出向いてもらい地域の子育て資源について直接親子に紹介している。拠点も1メンバーである「子育て支援力向上検討会」を元に生まれた「子育て応援マーク」を配布することで、子育てを温かく見守る雰囲気作りを継続して行っている。現在も拠点での子育て応援マークのチャーム配布と子育て応援ステッカーの掲示に協力してもらっている。
- 4 妊娠中の夫婦が産後の生活のイメージを作るきっかけとして「カジークジ」を導入した。泉区オリジナルの子育て情報を反映させ、具体的な行動につなげられるよう工夫した。

拠点事業としての成果と課題

- (成果)
- ・養育者が自身の経験や体験を他の養育者や妊娠期の家庭、さらには自分と同じ課題や悩みを抱く養育者に向けて伝えること自体がボランティア活動であり、自分が恩恵を受けたら次の世代に伝えていきたいと考える養育者もいるため、思いを繋ぐことが出来る機会を作った。
 - ・「子育て応援サポーター」について、区と協力して広く周知・募集したことにより登録者数も増加し、地域での子育て支援活動につながっている。
- (課題)
- ・「子育て応援サポーター」について、区のアンケート(R6)では子育て家庭の認知度が24.5%で今後も周知の必要性がある。応援サポーターが地域の支援の場に居ること、守秘義務を守り傾聴する人であり、相談者の気持ちや相談内容に応じて相談先につなげる人であることの周知をし、養育者が安心して相談できることを知らせていく。
 - ・応援サポーターが地域でより活動しやすくなるよう、地域に出向いて育成研修を開催するなどの展開を、区と共に検討していく。
 - ・子育て家庭のライフスタイルや考え方は変化しているため、担い手の方々や関係機関に向けて、今の子育て家庭の現状やニーズについて研修などを通して伝え、理解を広げていく。

振り返りの視点

- ア 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。かつ新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- イ 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- ウ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- エ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- オ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- カ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- キ 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ク これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

【作業用シート（非公表）】

相互振り返り作業での意見交換内容

- ・すきっぷのボランティア活動に、居場所での見守りを取り入れていく。(過去にはあったが、コロナ禍後には募集していないため、活動は無い) 応援サポーターの育成と絡めていくか、検討していく。
- ・応援サポーターの研修や仕組みが地域のニーズに合わせて活用していけると良い
- ・「親子の居場所連絡会」と「子育て応援サポーター向けの研修」の目的や内容について整理が必要
- ・地域の支援の場のゆるやかさ、温かさを損なわずに、応援サポーター向けの研修に参加してもらい働きかけをするには？
- ・「応援サポーター」が増えたが、どう活動が広がるか、深めるかといった今後の展望について、区・拠点の担当間でもっと話しあう必要がある。
- ・応援サポーターを地域での活動につなげるために地福計画の地区計画との関連性を考慮しながら、研修の地域展開も視野に入れて検討する。
- ・応援サポーターに何を求めるかなど今後の方向性について区と一緒に検討していく。

有識者との意見交換内容・コメント

地域のバックアップ支援

つどい、子育てサロン、親子サークルなどの活動のバックアップ支援を継続してやっていく。
親と子のつどいの広場の利用がアンケートに反映されていない(区のアンケート)。他区では記載あり。

地域の現状

す: 親子サークルは、一般的には共働き世帯増加で減少傾向も、泉区では平成27年から10サークルを維持している。区、拠点、社協がサークル活動を支援している。リソースは沢山ある。今後は応援サポーターの活動について考えていく。
有識者: 地域の人材がリソースとしてあるので活用していける。

多様な人の支援

外国につながる・シングル、ステップファミリーなどの多様な人を支援しつつ、地域の人材になってもらう。
例えば、多言語対応のボランティア確保(中国語・ベトナム語など)。
特に外国につながる親子は親のネットワークの中で完結しており、こどものためには日本のコミュニティに入っていた方がよい。包括的な支援が必要
す: 外国につながる人向けの事業を居場所で行っている。外国語の得意な利用者をボランティア人材として登録してもらい呼びかけを個々に行っているが今後広くアピールしていく。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	<ul style="list-style-type: none"> ・エリア別子育て支援ネットワーク連絡会や、子育てサロンとのつながりの中で、その地域のサポートの状況を伝え、提供会員増加につながるような活動を継続していく。 ・利用会員を適切な支援につなげるため、丁寧なニーズ把握に努めていく必要がある、コーディネーターも支援先の情報収集や共有も必要である。 ・提供会員・両方会員数の拡大に向けて、新たな発掘が必要である。コロナ禍のため、サロン訪問などもできなかった。地域の場に向向いてPRする必要がある。 	A	A
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		A	A
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		A	A
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

		R4年度	R5年度	R6年度			R4年度	R5年度	R6年度
①会員数	利用会員	496(115)	512(175)	602(199)	④活動報告件数		1,877	2,570	2,918
○は新規会員数	両方会員	32(5)	44(11)	42(5)	⑤コーディネート数		159	194	211
	提供会員	106(9)	116(20)	129(16)	⑥居場所預かり数		29	117	133
	合計	634	672	773	⑦利用者実数		85	146	164
②新規入会者数		129	206	220	⑧提供者実数		61	81	96
③入会説明会	参加者人数	269	271	238					

1 横浜子育てサポートシステムの区民への周知(以下、子サポ)

- ・区の協力により広報よこはま泉区版に「横浜子育てサポートシステム」(以下、子サポ)の説明を毎年掲載した。提供会員募集のチラシを小中学校の連絡システム「すぐー」から配信してもらった。その効果だったのか、提供会員希望の入会説明会参加者が増えた。
- ・両親教室に出向き、妊娠期から子サポのことを知ってもらうために事業の説明やどんな時に利用ができるか等を丁寧に説明した。
- ・エリア別子育て支援ネットワーク連絡会や子育てサロンに訪問した際には提供会員が足りない現状を伝え、チラシを配布した。
- ・こんにちは赤ちゃん訪問員の会議に参加し、「子サポdeあずかりおためし券」の周知や子サポの説明をした。より詳しく子サポの案内をしていただけたよう日頃疑問に思っていることを質問してもらい、共有することで疑問の解消につなげた。

2 事業の利用しやすさ

- ・スマホから入会手続きができるようになり、説明会后に丁寧に案内することにより、R5.6年度は新規入会者が増えた(データ②)
- ・子サポのひろば(居場所)預かりがあるときは、「子サポ預かり実施中」の看板をひろばに掲示し、活動の様子がわかるように周知して利用に結び付けた(データ⑥)
- ・コーディネートする際には利用会員から丁寧に聞き取り、事前打合せに同席し、活動内容を確認しあい、スムーズに活動できるようにフォローした。
- ・入会説明会の時や妊娠期のプログラムの時に、リフレッシュで利用できることや養育者が在宅でも利用ができることなどを事例としてあげ、多様なニーズに応えられることをアピールした。
- ・すきっぷに行きづらい地域には出向いて、出張入会説明会を実施した。
- ・泉区では6か月以上のお子さんひろばで提供会員が預かり、入会説明会をじっくり聞いてもらえるようにした。提供会員が居場所で預かるため預かりの疑似体験にもなっている。預かっている様子もわかるので預かることの不安を軽減した。

様式1-6 地域子育て支援拠点事業評価シート

3 丁寧なコーディネートと継続できるように支える

- ・登録したばかりの提供会員には自分の子育てから時間が経っている不安などを少しでも解消するために入会説明会の見守り託児をお願いし、今後の援助活動に繋げた。また定期的な活動がない方には会員を継続してもらえるよう入会説明会の見守り託児を優先的に連絡するよう努めた。
- ・システムを変更したことにより、活動報告書を作成する提供会員向けに説明会や交流会を実施した。また事前打合せ時には提供・利用会員に丁寧に伝えられるように区支部独自のマニュアルを作成し説明した。
- ・システムの変更に伴い、報告書の入力に抵抗感のある会員には安心して活動を続けてもらえるようにきめ細かく丁寧にフォローした。また月に1回ひだまりタイム(*1)を設け、提供会員と話せる場の設定をした。
- ・ヒヤリハット事例の収集を実施し、居場所スタッフと協力し、養育者からも収集を行い、会員に共有した。会員宅の場合はチェックリストを活用して事前打合せをしっかりと行った。
- ・提供会員交流会のあとに茶話会を行い、近況など話し合う時間を設けた。長年活動されている会員さんには労をねぎらったり、新たに会員になった人には、経験談を聞く良い機会になった。
- ・提供会員から聞いた体験談や経験、うれしかったことなどを子サポ通信で共有した。

4 養育者のニーズに合った支援と他機関との連携

- ・迅速に対応が必要な養育者には、保健師の同行で家庭に訪問して入会説明を行いすぐに利用につなげられた。また保健師からの問合せも多くなり、個々に事情に合った利用方法を伝えることで、ニーズに添った支援につながった。
- ・コーディネートを進めるにあたり、様々な選択肢の中から、養育者のニーズにあったもの・子どもにとってより良い対応について、利用者支援事業(横浜子育てパートナー)と連携を図り検討しながら情報提供を行った。
- ・利用会員からの依頼時に丁寧に聞き取りを行い、コーディネートをを行うが、必要に応じてその人のニーズに合わせて他にも使える支援(保育教育コンシェルジュ・産前産後ヘルパー、一時保育・預かり等)も紹介した。
- ・子サポだけで抱え込むのではなく、養育者のニーズに合わせて、必要なサービスを一緒に考え、他の携わっている機関と協力し合い情報共有をしてより良い必要なサービスにつながるよう努めた。
- ・新しい制度ができるたびに関連する報告書様式の改訂やシステム構築において、システム班の一員として協力を行った。

評価の理由(区)

- 1 地区によっては提供会員が足りておらず、養育者のニーズに応えることができていないこともある。そのため、広報よこはま泉区版を活用して情報発信を行ったり学校長会や保育園園長会にてチラシの配布の依頼をしたり、横浜子育てサポートシステムの認知度の向上を図り、提供会員の増員に努めた。
- 2 母子健康手帳交付時面接や、個別面接、乳幼児健康診査等で、必要な方に事業の紹介を行っている。また、支援が必要な利用希望者については、区が直接拠点につなげることでスムーズに利用できるようにしている。
- 3 定例会にて会員も参加できる研修会の情報を共有しているが、参加に至るまでの工夫が必要。
- 4 定例会にて気になる利用者を情報共有してもらい、必要に応じて拠点への助言や連絡調整を行っている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・「子サポdeあずかりおためし券」の周知に努めた結果、利用会員希望の人が増えているが、新システムになったことにより入会説明会後すぐに会員登録ができるようになった。参加者に対し、スムーズに会員になれるよう丁寧に対応し、入会につなげた。
- ・提供会員の活動状況や条件を把握し、会員にとって負担が偏らないように丁寧なコーディネートをすることで、多くの提供会員に活動の場を設けることができた。
- ・全会員が円滑に新システムに移行できるよう区独自のマニュアルを作成したり、個々にも丁寧に対応した。

(課題)

- ・提供会員が足りていない地区については、引き続き周知や声掛けが必要。提供会員が増えるよう、エリア別子育て支援ネットワーク連絡会や、子育てサロン等の地域でも呼びかける必要がある。
- ・会員の確保のため、若い世代(学生)にも声をかけて、入会説明会を行い提供会員になってもらえるように働きかけを検討していく。
- ・システムが始まったことで報告書を持参する必要がなくなり、提供会員との顔を合わせる機会が減ってしまった。会員の声を聞くために更なる仕掛けを考える必要がある。

振り返りの視点

- ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。
- イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。
- ウ 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を含め、利用したい人が利用に結びつくための工夫をしているか。
- エ 会員が相互の合意のもとに安心安全な活動できるよう、丁寧なコーディネートができていないか。
- オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や追加のフォロー等を行っているか。
- カ 活動における事故防止のための講習、個人情報取扱いに関する注意喚起など、会員への安全対策をはかっているか。
- キ 提供・両方会員が安心・安全な活動を継続して行えるよう研修会等の取組がなされているか。
- ク 会員が活動の意義を感じられ、会員間の親睦を深め信頼関係の構築のため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。
- ケ 援助活動の調整時や会員の声から把握した子育てのニーズを地域子育て支援拠点としての事業に活かしているか(新たな事業の実施や事業の見直しなど)
- コ 利用相談の内容に応じて、子育てサポートシステム以外のサービス等の情報提供や関係機関に適切につないでいるか。
- サ 専門対応が必要と考えられる相談については、専門機関に適切につないでいるか。

【作業用シート(非公表)】

相互振り返り作業での意見交換内容

- ・泉区の子サポ説明会は託児があるのが特徴的。子サポの疑似体験ができ不安軽減につながることも狙いがある。
- ・システム変更時には丁寧にフォローしている。報告書の入力等も丁寧に説明し、わからないところは都度説明をしている。
- ・会員が増えたのはお試し券も一因になっている。
- ・ひだまりタイムは預かる側の互いの育ちの場にもなっている。
- ・若い世代の預かりサポートが増えても良い。ボランティアをすると単位をとれる大学もある。若い世代にも働きかけて、子育ても垣間見え良い経験になるのではないか。
- ・区は訪問入会説明会に同行し、サービスの利用方法など一緒に考えてくれる。

有識者との意見交換内容・コメント

提供会員比率の高さ

28.4%と他区より高く、地域活動の活発さが要因。

利用内容の内訳

送迎46%、預かり45%

子サポの宿泊は慎重に。児家センや児童養護施設などで拡充してやるべきだったのでは。今後夜間預かりが始まってくるとハイリスク層の利用も考えられる。区と子育てパートナーが連携し、ケースマネジメントしていく。

日中を含め提供会員の負担を軽減することが大切。

他制度との連携

一時預かり、誰でも通園制度、ショートステイなどの活用を検討。子育てパートナーが、他制度も合わせて紹介するなどケースマネジメントできるとよい。

7 利用者支援事業

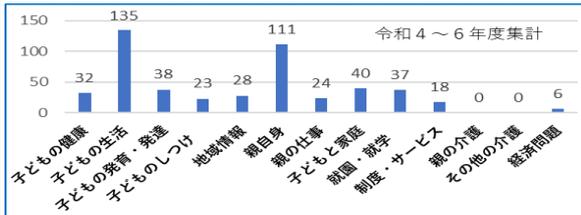
目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	・幅広い世代への事業の周知 ・積極的にアウトリーチを行い、顔の見える関係性を強化すると同時に、地域からもつながる仕組みを検討し、関係づくりを図る。 ・妊娠期の支援を地域に出向いて行い、出産前から地域の支援を知り、繋がるきっかけを作る。 ・地域の中で包括的な支援ができるようになることを目指す。	B	B
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。		A	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。		A	A
☆			

評価の理由(法人)

(主なデータ)

【相談】令和4年度から令和6年度 集計(人)

(%) 妊娠期の事業(他機関連携)



	R4	R5	R6
父親からの相談	8.7	8.9	10.3
利用きっかけ			
他機関からの紹介	18.6	19.1	19.9
地域活動	8.1	15.2	22.0
支援方針			
他機関の紹介	55.1	48.1	92.7
他機関への仲介	17.0	9.5	18.4

妊娠期の事業(3年間)	
沐浴	112人
妊婦体験	36人
栄養講座	46人
カジークジー	49人
地域開催	18人

多胎児・障がい児の養育者・親子向け

・入学前支援のべ56人 ・障がい児支援のべ19組 ・とらいあんぐる(R6開催 11組) ・双子ちゃんあつまれ/オンラインおしゃべり会 ・音楽療法士グループによるおとあそび3組8名 ・ひとり親事業(年1回開催計7組)

訪問・連携

・子育て支援者会場 ・区赤ちゃん教室 ・区母親両親教室 ・子育てサロン ・親と子のつどいの広場 ・地域ケアプラザ主催親子のひろば ・泉地域活動ホームかがやき ・白百合ベビーホーム ・多胎児サークル「みどふぁど」 ・ダウン症児の親の会「ハッピークローバークラブ」 ・地域訓練会「つくしんぼ会」 ・お話し会MAY ・わらべうたであそぶ会ひふみ ・人形劇団はまなす ・手品とバルーンアートくみちゃん ・おとむすび「ルアナアイナ」 ・4ヶ月健診シールラリー
 ・ひとり親サポートよこはま ・児童発達支援

主な事業参加後の満足度・感想(抜粋)

【とらいあんぐる】(満足度5段階評価) 講義4.6 親子遊び5 親同士の話4.6 スタッフの関わり5 全体5
 同じ悩みを持つ親同士交流できて良かった。／子への接し方や声の掛け方を教えてもらい、家でも実践したい。／先生の話
 を夫婦で共有できたことが良かった。(父母で参加した方)

【出張ひろば】

・開催場所利用なし6割 ・すきっぷ利用なし2割 ・以降開催希望100%
 近くに交流の場が出来て嬉しい。／何度も前を通っていたが障害がなくても利用できることを初めて知った。

【入学前の気持ちを話そう】

わからないこと、やるべきことを知ることができて良かった。／体験談を生で聞くことができるのは貴重な時間だった。／入学してから困らないようにできることをしておきたい。／次は先輩として協力したい。

1 事業周知及び区民への認知

・区主催の「母親・両親教室」のプログラムに、地域子育て支援拠点(以下、拠点)、横浜子育てサポートシステム(以下、子サポ)、横浜子育てパートナー(以下、パートナー)や地域の子育て支援情報を案内する時間を設けてもらい、周知に努めた。終了後には希望者を連れて拠点に行き、案内や見学、地域情報の提供をしながら、利用中の親子と直接交流する機会を設けた。(再掲)
 ・「エリア別子育て支援ネットワーク」(*1)の会議や「親子の居場所連絡会」(*2)の場において、地域の子育て支援関係者と共に活動を行ったり、研修の機会を設けるなどしながら、拠点事業やパートナーの周知を行った。
 ・妊娠期から子育て世代に向け必要な支援を親と子のつどいの広場(以下、つどいの広場)や地域ケアプラザと共に考え、沐浴体験やひとり親家庭に向けた事業等が、利用者にとって身近な地域で実施されることの意義を伝えると同時に、地域においてパートナーの周知を図った。
 ・区内の子育て支援関係施設や子育てサロン、赤ちゃん教室を訪問し、事業の周知とアウトリーチを行った。
 ・区が主催する子育て支援イベントで、パートナーの周知のために作成したウェットティッシュやチラシを配布した。区の窓口で流すスライドショーを作成し、拠点の事業と併せ、パートナー相談について区民に周知した。
 ・つどいの広場に対して丁寧に事業について説明し、次年度からの定期的な訪問と出張相談の実施につなげた。

様式1-7 地域子育て支援拠点事業評価シート

2 子育て関係機関や地域とのつなぎあう関係を構築し、個別の相談に対応する

- ・つどいの広場や地域ケアプラザに働きかけ、妊娠期から地域の社会資源を利用してもらえるような事業(離乳食作り・赤ちゃんお世話体験・ひとり親支援等)と一緒に開催した。訪問や出張相談を実施し、養育者へのアウトリーチと施設のニーズの把握に努めた。
- ・「入学前の気持ちを話そう(*3)」を継続実施し、参加者も増えている。また、翌年度には先輩となった親に支援する側として参加してもらい循環を図った。
- ・先天的に障がいや疾患をもって生まれた子(ダウン症や口唇口蓋裂等)の親同士のつながりを作りたいという区のニーズに応え、親子で参加し親同士が交流する機会を提供した。参加した親子が一緒に楽しむことができるよう、区内で活動する音楽療法士の協力を得て、親子で楽しむ「おとあそび」のプログラムを実施した。
- ・日ごろ利用している拠点の居場所で「とらいあんぐる(*4)」を実施し、通いやすさや、継続した場の利用に繋げ、区の「親子教室」に参加しない親子や参加できない親子に対して、区とも相談しながら、親の関わり方を考え、参加者の親同士が交流できる場を提供した。閉館日である月曜日に実施し、参加者の親子に配慮し、ハードルを下げた発達支援の場とした。親子の遊びを通して親が子どもの今の育ちを確認し、心理士のミニ講座や相談ができる時間も設けた。
- ・ひとり親に向けた事業を実施する際は、地域の理解を深め、親子が地域につながるようにとの考えから、会場を地域資源である地域ケアプラザや泉ふれあいホーム(社会福祉協議会事務所)に設定した。区のワーカーやひとり親サポートよこはまに周知を依頼し、就労相談につなげたり、地域や区の相談を案内した。
- ・保健師や助産師、母子保健コーディネーターや拠点スタッフと利用者の姿を多角的に捉えて共有し、支援の利用を勧めてもらったり、必要なプログラムや社会資源を紹介したり、つなぎ合う関係を構築した。
- ・新システムやSNSで来館しなくても相談できることを発信し、電話での相談につながった。匿名でも相談が受けられることから相談者の中には定期的に相談する親もいるため、傾聴し寄り添い、相談者を多面的に捉え丁寧な対応を行った。

3 ネットワークの構築と協働の関係作り

- ・区内のつどいの広場に声をかけ事例検討研修を行い、養育者の支援についてスタッフが学ぶ機会を作った。スーパーバイズをつどいの広場運営法人の理事長(公認心理士)に依頼し、スタッフのスキルアップと、つどいの広場と拠点との連携強化を図った。
- ・区や関係機関と、親子の姿や地域の課題等共有し、必要な支援や資源を共に検討して、出張ひろば(*5)の開催につなげた。
- ・モデル区として担った包括支援センターや先行区であるこども家庭センターの機能のひとつとして、妊娠期の支援を区と共に検討し、「家事育児シミュレーションカードゲーム『カジークジー』(*6)」を取り入れる際には、互いに意見を出し合い、カードゲームの発案者でもある、一般社団法人チーム主夫ラボ代表理事も交え、三者で十分協議し実施を決めた。
- ・保健師や助産師、母子保健コーディネーターに妊娠期の事業の開催に向けてアドバイスや協力をもらい、沐浴体験の事業に使う動画を一緒に作成した。
- ・地域ケアプラザで講座を開催したり、つどいの広場に必要事業の提案を行い事業を実施するなど、地域に出向いた支援を行い、地域資源との関係作りに努めた。
- ・「親子の居場所連絡会(*2)」の研修内容の検討を泉区こども家庭支援課・区社会福祉協議会と行い、アンケートから担い手のニーズを把握した上で研修会の講師を依頼した。(保育園地域支援保育士や区内の子育て支援団体等)連絡会では、おもちゃ作りやグループで交流する時間も設け、参加者同士の関係作りや活動支援も行った。
- ・区や区社会福祉協議会、拠点の人材育成機能と一緒に子育て応援サポーターの養成講座やフォローアップ研修に取り組んだ。

- (*1)エリア別子育て支援ネットワーク: 泉区を地域ケアプラザが担当する8つのエリアに分け、関係機関や地域の担い手が参加して地域の特性を鑑みながら子育て支援活動を実施。担い手同士の関係性や理解を深め、子育て家庭と地域を繋ぎ、子どもが健全に育つことを目的とする。令和5年から、より細かくエリアを分けたことによりネットワーク数が5から8に増加。拠点は区・区社協・地域ケアプラザと共に事務局を担い、全エリアに職員を配置している。
- (*2)親子の居場所連絡会: 子育てサロン・つどいの広場に加え、定期的に親子が過ごせる居場所を設けている地域ケアプラザや幼稚園・保育園・認定こども園を対象に、年に2回 研修と交流会を行う。拠点が主な事務局となり、区・区社協の協力を得ながら開催している。
- (*3)入学前の気持ちを話そう: 小学校入学に際し、特別支援教育を受ける予定の年長児や年中児を持つ親に、気持ちを話し、経験談を聴くことができる場。
- (*4)とらいあんぐる: 発達に特性がある子やその不安を抱えている親子が参加し、発達を促す遊びを親子で楽しみ、養育者同士が交流できる支援の場を休館日の月曜日に開催した。
- (*5)出張ひろば: 拠点から遠い地域にスタッフが出向き、地域の障がい者福祉施設の地域開放ルームを借りて開催。
- (*6)カジークジー: 出産後の「育児・家事・仕事」について、カードゲームを進行しながら日常に起こり得ることを見える化し、役割分担やコミュニケーションの必要性に気づくことを狙いとする講座。産前産後に利用できる区内の子育て支援情報も知ることができる。

評価の理由(区)

- 1 乳児家庭全戸訪問事業の訪問員の定例会にて、すきっぷや子育てパートナーを紹介する場をつくった。赤ちゃん教室でも年1回子育てパートナーの会を設け、紹介する機会を設けている。今後は子育てパートナーのちらしを積極的に配布し、周知に協力していきたい。
- 2 定例会や必要時に相談の状況・内容の報告を受け、横浜子育てパートナーが適切な支援を行えるように助言した。また、必要時連携しながら支援を行った。
R7年度、子育てパートナーの交代に伴い、相談・対応のスキルアップが図られるよう、助言や研修の調整を行った。
- 3 区の既存の連絡会に参加し、担い手と円滑な連携が図れるような調整をした。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・地域からつながる相談が増えた。また、支援の紹介・仲介先として地域の資源を案内する件数が増えた。
- ・地域の担い手のスキルアップを図り、連携を強化した。
- ・妊娠期やひとり親の支援について、地域で実施することの意義を区と共に伝え、地域の理解を深めた。
- ・地域のニーズを把握し出張ひろばの次年度の開催につなげた。
- ・ポピュレーションアプローチと個別支援のバランスを考え、多機能の子育て支援拠点の強みを活かした事業の実施に努めた。

(課題)

- ・地域での定期的な出張相談の開催と地域へのアウトリーチに取り組む。
- ・妊婦やその家族、これから親になる人に向けて、地域の資源の周知と利用を促す事業を提供し、参加の機会を増やす。
- ・相談者をつないだ後も状況や気持ちに寄り添った支援をする。
- ・こども家庭センターの機能を理解し、活動記録や会議の場を適宜活用し、より細やかに区と連携する。

振り返りの視点

- ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。
- イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。
- エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。
- オ 拠点内でパートナーの役割を理解し、日頃から相談者を拠点内でつなぎ合うことについて、お互いの役割分担を明確にしたうえで、相談対応・利用支援を行っているか。相談者の相談内容に応じて継続対応やつながる必要性を判断し、対応しているか。
- カ 専門的な対応を要する相談に対して、相談内容と相談者のニーズを踏まえ、速やかに関係機関への紹介・仲介・支援依頼を行うなど、適切な対応をとっているか。
- キ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら、フォローをしているか。
- ク 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点で振り返りや検討を行っているか。
- ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。
- コ 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。
- サ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整、提案や新たな創出につなげているか。

相互振り返り作業での意見交換内容

- ・応援サポーターの活用をさらに検討していきたい。個人情報保護に留意した上で、応援サポーターの「傾聴しつなげる人」の役割を大切に、利用者支援ともつながることができるよう養成や研修に取り組んでいく必要がある。
- ・ネットワークに拠点スタッフが入っているので拠点の相談機能を理解してもらえるとよい。
- ・入学前の気持ちを話そうという事業は、継続して実施し、話を聞いた母が次年度は話す立場になり循環し、養育者同士の支え合いになっている。社会資源づくりといってもいいのではないか。
- ・ここ数年他機関からの紹介が増え地域からの紹介も増えている。
- ・包括としての取組みを利用者支援がしっかり行ってきたので、今後は7事業と連携した取組みに広めていく。
- ・「とらいあんぐる」は支援機関とつながる前やつながりづらい親子にむけて、日頃利用している拠点としての場所の担保ができ、居場所で実施できることが強み。

有識者との意見交換内容・コメント

相談内容の多様性

親自身の生活、家族関係、経済的問題など、子育てだけではない悩みがかなり表にも出てきている。子育てパートナーは間接援助。パートナーが区や地域資源と連携し、ケースマネジメントをしていく。相談しやすい仕組み、繋げる仕組みをパッケージとして提供し、利用できるように支援していく。